

連載

恋旅 「SWEET 19 BLUES ～その1～」

竹村 美紀子

今回、この機関誌「縦横夢人」に「連載をしてみませんか？」と、事務局長の宮野さんからお話を頂いた時、「う～ん、でも私が何について書けるかなあ」と呟いていると、「恋愛についてはどう？」と提案をいただきました。

うん、まあ確かに、別に恋愛のエキスパートでも何でもないけれど、と言うか、むしろ未だ一人で頑張っている私だけ（笑） 書くとなればやっぱりそれかなあ、と思ったわけです。

そして、何か面白いネタはあったかな、と過去をさかのぼっていきました。そうです、何十年も、です（笑）

ずーっと昔、まだ私が中学生だった頃、中1の時から大好きな男の子がいました。

長身で、足が速く陸上部員で、さらに野球少年。と一ってもひょうきんで、常にからかわれ役に徹しているのに、実はとても頭も良く成績優秀な男の子でした。

その子は、家が学校から遠く、バス通学をしていて、毎日誰よりも早く学校に来ます。

そして、超下手クソ、でもクソ真面目なテニス部員の私は、これまた誰よりも早く学校に行ってテニスコートを整備するのです。

そんな私の、早起きして学校に行く唯一の楽しみが、朝、教室でその子に会って挨拶を交わすってことなのです。我ながら、なかなか可愛い女子中学生でしょ！

そんな当時の私は、その子の誕生日、バレンタイン、クリスマスと、毎回一生懸命に手紙を書いて、プレゼントと一緒に渡すわけです。

そして、はい、もちろん毎回あっさり完全スルーです（笑）

でも私、中学3年になってすぐに、交通事故で、ある日突然に学校からはぱったり姿を消すことになるのです。

ああ、私、学校大好きっ子だったのになあ。

当然、その子がお見舞いに来る、なんてことなどあるはずもなく、しかしまあ、私もこんな姿になった自分を（それに病院に運ばれてすぐに坊主にされてたし！！）見られるなんて死んだ方がマシだぐらいな気持ちだったんで（例えですよ、例え）それはむしろ良かったのですが、それでも友達がお見舞いに来てくれる度に、毎回、「ねえ、彼はどうしてるの？」と聞いたり、そしてやがて、友人たちは皆、高校に進学したのですが、相変わらず悶々と入院生活を余儀なくしていた私は、病院にお見舞いに来てくれる友人達に「ねえ、彼女は彼女できたの？彼は高校でモテてるの？」とか、いつも聞いていました。

でも私の友達は、誰もあまり彼に興味がなかったようで、有力な情報は何一つ私に入ってくることはありませんでした。

あ、あれ？いや、もしかして皆、私に気を使ってくれてたのか？

結局のところ、事故をして以来、彼と会うことも話すこともありませんでした。

そして私ももう、彼のことはちょっと忘れてきていました。

その後、彼は岡山の大学へ進学したことを風の噂で聞き、そして私もリハビリセンターを出て地元に戻り、その後は毎日、実家と職場の往復のみ、と言う、なかなか地味～な日々を淡々と送っていたのです。

そんなある夏の日曜の午後、な、な、なんと～！！！！なことが起こるのです。

続く。